

(英語版)

(アラビア語版)

(目次)

見果てぬ平和 ― 中東の戦後75年(八十九)

第四章・中東の戦争と平和(三)

八十九 東の間の平和・イスラエルとエジプトの和平(三一三)



このように書き連ねるとサダトが英雄とは言えないまでもエジプトおよびアラブ諸国から平和の貢献者として高く評価されてもおかしくないように聞こえる。しかし現実には全く逆であった。彼のエジプト・イスラエル単独和平はアラブ以外の世界各国からは高い評価を得たものの、肝心のアラブ諸国からは「パレスチナのアラブ人同胞に対する裏切り」ととられサダトは国内外で孤立する。サダトのような軍人政治家は戦争に勝って平和を得てこそ英雄である。しかし勝敗がはっきりしないままに戦争を終結し外交手腕によって平和をもたらしても国民大衆は彼を「裏切者」とそしるのである。

サダトにその後もう一つの誤算が生じた。1979年、イランにイスラム革命が発生、サダトは人道的配慮からムハンマド・レザー皇帝の亡命を受け入れた。しかし皇帝はサダトの好意を踏みにじりカイロから米国へ向かったのである。エジプトの大衆はこれに猛烈に反発、非難の矛先をサダトに向けた。中東に平和をもたらさし、シナイ半島の返還を実現したにもかかわらず大衆はサダトに冷たかった。

1981年十月、第四次中東戦争開戦記念の軍事パレードを観閲中のサダト大統領はパレードの隊列で行進中の歩

兵車両部隊によって暗殺されたのであった。

(続く)

荒葉 一也

E-mail: [Arehakahazuyai@gmail.com](mailto:Arehakahazuyai@gmail.com)